日本のヒトラーの秘密

斎藤 栄

日本のヒトラーの秘密
斎藤栄
© Sakae Saito 1984

昭和59年8月15日第1刷発行

発行者——加藤勝久
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112
電話 東京(03)945-1111(大代表)
振替 東京8-3930
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国オフセット株式会社
製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えします。 (庫一)

ISBN4-06-183304-9 (O)

講談社文庫

日本のヒトラーの秘密

斎藤 栄

講談社

目次

プロローグ　7
第一章　美しき城塞　21
第二章　警部の疑問　39
第三章　殺人土曜日　66
第四章　神経科患者　86
第五章　ヒトラー伝　108
第六章　二十四の証（あかし）　121
第七章　時代の相似　143
第八章　テープと女　153
第九章　三柱推命説　172

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

第十章　非情の官僚　195
第十一章　最後の密室　208
第十二章　芸術と政治　231
第十三章　推理の展開　249
第十四章　五つの予言　265
エピローグ　291
解説　影山荘一　298

日本のヒトラーの秘密

プロローグ

1

私には二人の妹がいる。年齢上の方はロザで、年齢下はエマという。

どちらも共産主義的無政府主義者だった父が、自分の夢を籠めて名づけたのである。名前の謂は、言うまでもなく、ポーランド生まれのドイツ婦人闘士、ローザ・ルクセンブルクに由来するロザ。それにロシア生まれの女流無政府主義者、エンマ・ゴールドマンからとったエマだ。

妹達は、父の思想的なものを、ほとんど知らされていなかった。だから、昭和初期の命名にしては異常な自分達の名を、迷惑にこそ思え、ありがたいと感じたことは、ほとんどなかっただろう。

実際、終戦後などは、やたらと混血児が生まれ、そのために、妹達がまるでそうした運命の星の下に生まれた女性のように見られたことさえあった。

しかし、私は父の存命中に、父の口を通して、悲劇の女性、ローザ・ルクセンブルクの話や、エンマ・ゴールドマンの生涯を聞くチャンスを持つことができた。

と言っても、それは私が小学生の頃——当時は国民学校と称したが、その四年生のときだから、記憶は曖昧だし、今日になって考えると、数多くの誤まりを含んでいた。

大体、私はかなり幼ない時分の出来事を、大人びた記憶の中に、いくつか持ちつづけて来ている。たとえば、昭和十一年二月二十六日に起きた、いわゆる2・26事件なども、それを報じた新聞記事や、鼈甲縁の眼鏡をかけて記事を読み耽る祖母の姿などを、ハッキリと思い浮べられる。けれども、その年、私はたったの三歳になったばかりだから、正直なところ、実際の記憶なのか、もっと後年のシーンを当時のものと錯覚しているのか、その辺はさだかでない。

が、いずれにしても、父は、彼が敬愛する二人の女流闘士について、息子のために情熱を傾けて物語ったことだけは間違いない。

話の詳しい内容は省略するが、そのとき、私は初めて「ヒトラー」という人物の名を耳にしたのだ。

父は言った。

「……ゴールドマンはあらゆる意味で、先見の明を持った女性なんだよ。産児制限運動や反戦活動をして、そのたびに投獄されているけれど、少しも、へこたれやしなかった。この二つが、どれほど大切な活動かは、おまえがもう少し大きくなればわかってくるだろう。女でありながら、国際的に活躍した人物はそんなにいやしない。スペインに内乱が起きたときは、そこの無政府主

義者を助けて活動したんだ。無政府主義者の〈相互扶助〉の精神くらい素晴しいものはない。それを無謀にも、叩きつぶそうとしたのがヒトラーだ。ヒトラーは空軍をスペインに派遣して、正当な労働者の権利を奪う独裁者に協力した……」

こんな調子で、父は一方的に喋り続けたのを覚えている。

多分、このときに、私の記憶が混同してしまったのだと思う。ローザ・ルクセンブルクに傾倒していた父が、基本的な事実関係を誤まって話すわけはないから、これは明らかに私の間違いに相違ない。

まったく奇妙なことに、私は父から、ローザがヒトラーに殺されたと教えられたような気がしているのだ。

それによればこうなる。

――ヒトラーの命令で、ローザは虐殺されたんだよ。兵隊が暗闇の中から突然、現われて、リープクネヒトと歩いていたローザを殴りつけた。丁度、ドイツの国会議事堂の灰色の壁のそばだった。ローザが倒れると、その躰にピストルの弾丸をなん発も撃ち込んでね。最後には、ドブの中へ蹴込んでしまったんだ。ひどいことをしたものだよ……。

どうやら、私は、父が話したナチの国会議事堂焼打事件と、ローザの虐殺を一緒にしてしまっていたのだ。むろん、父は系統的な解説をしてくれたわけではなく、だから国民学校四年生の私には、ローザの死と、ヒトラーの台頭と、どちらが先なのかを知るすべはなかった。

ただ、私は子供心に、父がどうして虐殺された女性の名を、妹につけたのか、それが不思議

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

だった。父に訊くと、答えはハッキリしていた。
「ローザは偉い女なんだよ。そういう女になってもらいたいからね」
〈偉い女〉という説明には、反対の理由がみつからない。私はそれ以上、突っ込んで質問はしなかった。
わかったことは、〈偉い女〉を殺したヒトラーに、私が反感を持ったという事実である。
極く最近、私はローザについて詳しく調べてみた。
現在、残っている、幾枚かのローザ・ルクセンブルクの写真を見ると、彼女は鼻筋がとおった、二重瞼で額の広い、なかなかの美人である。
私に言わせると、父は観念的な無政府主義者で、しかも大変なフェミニストであった。したがって、父がローザの名を、自分の長女につけた裏には、ローザの美しい写真も、ものを言ったに違いないと睨んでいる。むろん、そのこと自体は、父を責める材料になりはしないが。
それに加えて、理想主義者としての父が、どれほどローザの生き方に憧れたかは、想像にかたくない。彼女が生涯を通じて愛したという信条――ひとつは、つねに両端の燃えるローソクのように生きなければならない、というのを、父はよく私に語ったものである。しかし、多少、合理主義的な私には、〈両端の燃えるローソク〉というイメージがピンとこないで、彼女が友人に書いた手紙の一節の方が好きだ。
「……私の墓標には〝ツヴィ、ツヴィ〟の二字があればたくさんです。これは私がたいへん上手に鳴き声を真似たので、すぐに近よってきた四十雀の鳴き声です。この〝ツヴィ、ツヴィ〟は普

段は美しく、すんだ金属性の音なのですが、ここ数日来、ごくわずかの顫音と、軽い胸音をともなっています。これがなにを意味しているか、あなたにはわかりますか？　春が来たことの最初の報せなのです。雪があり、霜があり、孤独であるにもかかわらず、私たち――四十雀と私――は春の来るのを信じています。もし私がせっかちのあまり春を待てないような場合には、私の墓標のうえに、ただ〝ツヴィ、ツヴィ〟とだけかくことを忘れないでください」

とにかく、私は長い間、ローザがヒトラーに殺されたという誤謬を信じつづけてきた。つまり、それくらい、ローザにもヒトラーにも関心がなかったといっていいだろう。

確認されている歴史的事実は、次の通りである。

一九一九年一月十六日の「フォールヴェルツ」は、ローザが民衆によって殺されたと報道した。が、事実はまるで違っていた。その前の晩の九時頃、マンハイム街の隠れ家で逮捕されたローザは、エデン・ホテルに連行され、パプスト大尉に尋問された後、ホテルを出るとき、水兵に銃床で殴打されたのだ。この後、軍用トラックに載せられ、ピストルでとどめを撃ち込まれた。

死体は暗黒の運河の中へ棄てられた。彼女の死体が発見されたのは、その年の五月三十一日だったという――。

一部分は、父に聞いたストーリーに似ているが、この虐殺はヒトラーとは直接関係がなく、ローザの虐殺は、当時のドイツを支配していた社会民主党政府の軍隊によっておこなわれたものである。

ヒトラーはこの年の夏になって、やっと、ナチの前身であるドイツ労働者党に入党したばかりの若造にすぎなかった。

ローザ・ルクセンブルクの話でわかるように、父がそれほどまでにして、私達にヒトラーの恐怖を伝えようとしたのに、不肖の子はのんびりと構えていた。

今の私にとって、ヒトラーはすでに過去の人物であった。平和憲法のもとで、繁栄をつづける日本には、戦前のドイツのような危険性はないと思っていたのである。

なるほど、石油危機にはじまり、物価上昇と節約ムードが起こって、庶民の生活は苦しくなったというものの、たいていのデパートは満員だし、街中には札ビラが舞っている。こんな状態では、ヒトラーもムッソリーニも出現しにくいはずだった。

先日、国電で隣りに乗り合わせた青年が、一冊の本を読み耽っていた。標題には、「君はヒトラーを見たか」とあった。一種のアンケート集で、さまざまな人間に、ヒトラーを目撃したときの状況を喋らせたものである。

その青年と本を見たときも、私の心は動かなかった。ヒトラー物が読まれるのは、第二次世界大戦の戦記物が、青少年に愛読される程度の現象に過ぎないと判断したからだ。

正直な話、私はあまりヒトラーに関心を持っていなかった。もし、思いがけない講演の依頼が舞い込み、私が一人の神経科医に会わなかったら、まだまだ「私にとってヒトラーとは何か」を、考えはしなかったことだろう。

それは昭和四十×年十一月十七日の出来事だった。

2

その日は冷え込んだかわりに、非常な快晴で、朝から気分が爽快であった。

私は、県の担当者と約束したとおり、午後一時十五分に、横浜駅西口の横浜高島屋ホール受付に着いた。

この日の講演は、神奈川県教育委員会の主催する土曜文化講座の文学の部としておこなわれるもので、私が控室にはいると間もなく、先に講演をすませた城山三郎氏が、少し火照った表情で姿を見せた。

ほんのしばらく、城山氏と雑談をかわしてから、私は演壇に立った。聴衆は県下在住の文学、美術に強い関心を持つ人達ばかりである。主婦、OLといった女性が多かったように思う。

私は、「推理小説・三つの楽しみ」という演題で、約一時間ほど喋った。推理作家として、私は、ミステリーの多様性をもつ楽しみということを、常日頃から考えていたので、この機会に同好の人々に話をしたかったのだ。

「三つ」と殊更に断ったのは、むろん、短時間のうちに、重点的な喋りかたをしたいと思ったからに過ぎない。

講演はまあまあのできだったようだ。聴衆は、時折、私の冗談に声を立てて笑ってくれたし、なん人かはメモをとりながら、真剣に聞いていた。

私の体験では、一時間の講演は、話が佳境にはいったころ、結末をつけなければならないので、どうしても心残りがする。しかし、会場に漲る熱いムードに満足感を味わいながら、私は演壇をおりることができた。

控室で紅茶を飲み、ひと息ついてからホールを出たのは、午後三時近かった。ホールの出口は、もうデパートの売り場になっており、右手奥にエレベーターがある。

私は何気なく、エレベーターの方角に歩きかけ、突然、横合いから自分の名を呼ばれたように思い、その方を見た。

「講演はもうおすみですか？」

ソフトな調子の声が、私の耳に心地よく響いた。卵型の輪郭をした顔。柔和な二つの細い眼が笑いかけてくる。髪は以前より薄くなったけれど、その童顔には見覚えがあった。

「永沢君か……。珍らしいじゃないか？　こっちへ来ているの？」

私は不意に親友を発見した嬉しさを、少し甲高い問いかけでまぎらわした。

永沢英明は、私の高校時代の親友である。といっても、交友の期間はたったの一年間に過ぎなかった。ただ、T高校二年生のひと夏、将棋のよき好敵手として、指し込み二十番勝負を戦わせた記憶が、いつまでも忘れられない。おそらく、当時、永沢は私より香車一本くらい強かったのではないか。私は角角香まで指し込まれた後、香落まで挽回したのを覚えている。

永沢は、Y物産の米穀部長だった父親の転勤と共に、T高には一年間在籍しただけで神戸へ去ってしまった。しかし、その後も、郵便将棋などをしたり、毎年の賀状の交換などは欠かさな

い仲だった。理数系の得意だった永沢は、その後、K大の医学部に進み、父親の反対を押しきって、神経科の専門医になっている。

「そうなんです」

と、これまでと変らず、永沢は丁寧な口調で言った。

「じゃ、京都の方は辞めて？」

私は、永沢がK大付属病院の神経科医長をしているとばかり思っていた。

「辞めたのか、辞めさせられたのかわかりませんけどね。とにかく、今は、あなたと同じ神奈川県の住人ですよ」

「それは驚いたな。どう？　もしよかったら、その辺でお茶でも飲まない？」

私はひどく懐かしい思いで、胸がいっぱいになった。

「そうしましょう」と言う永沢と連れ立って、デパートの外へ出た。彼の話では、三年前に亡くなった父親の法事のための買い物に、出かけて来たのだという。そして、たまたま通りかかったホールの掲示に、私の名を見かけ、しばらく私を待ち受けていたらしい。

私達は、地下名品街にある「ギボン」という喫茶店にはいった。この店の経営者が変人で、喫茶店だというのに、テーブルには灰皿を置いていない。入口のドアの上には、寺の山門にあるような木の扁額がかけてあり、そこには、「喫煙者このドアより入るべからず」と書き記してあるのだ。

たばこ嫌いの私は、もっぱらこの店を愛用しているが、たばこを吸わせない喫茶店は、日本広

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton